

宿縁

十月号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六一

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

本物の言葉に

出遇っていますか



大正十二年生まれのある老僧は今年九十
六歳になっていますがお元気です。この老僧
はかつて第二次世界大戦で日本の敗戦間際
にソビエトが参戦して捕虜となり、四年間シ
ベリアに抑留された経験をおもちです。
シベリア抑留は、旧満州において八月十五
日の終戦後、武装解除され投降した日本人捕
虜らが、ソビエト連邦によって主にシベリア
などへ労働力として移送隔離され、長期にお
たる抑留生活と奴隷的強制労働により約五
十七万五千人に上る人たちが抑留されまし
た。零下四十度の極寒環境下で満足な食事も

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号
浄土真宗
本願寺派
中原寺
TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六一

与えられず、苛烈な労働を強要され亡くな
った人の数は一割にも及んだといひます。
老僧とは日頃から親しくお付き合いをし
ていただいている仲ですが、生き証人とし
て戦争とは如何なるものか、また生死を境
いにした人間の条件とは何かをお聞きして
おきたかったです。

日本に帰還できるといふ一縷の望みが、
何度も貨車に積み込まれたわずかな窓から
差し込む光で日本から逆方向に走っている
ことを知り絶望に変わっていったこと、同
僚が死体となった瞬間からシラミが移動し
ていく光景、寒さをしのぐためにはその衣
服を待たせようとして自分のものにしたこ
と、赤化教育される中で連れ去られた仲間
がそれきり帰ってこなかったこと、今でも
月に一度は抑留されていた時の夢を見るこ
と等々、老師は七十余年前のできごとを静
かに語ってくれました。

西元宗助先生(一九〇九年〜一九九〇年)
は社会教育の分野で優れた教育学者として
知られた人です。鹿児島に生まれ、父母と
もに仏縁は深く、特に母は「かくれ念仏」(権
力から禁止された浄土真宗の信仰を、権力
の目を逃れて信仰する人や集団で、特に南
九州薩摩藩が多かった)の土徳のもとに育つ
た篤信の聞法者であったといひます。
西元先生は大学生の時、人生を、生きる

道を探り求めて親鸞聖人に出遇い深く帰依
しました。西元先生も先の老師と同様、終戦
から四年間シベリアに抑留されていました。
先生は一九五三年に抑留体験記『ソビエト
の真実』を出版していますが、その改訂版に
は次のような加筆をされています。

『〇君は、たえず小声で南無妙法蓮華経
と、お題目をととなえていた。それに唱和す
るように、私もまた、ひそかにお念仏を申
してくらしめた。クリスマスチャンのI君は、ひ
そかに神に祈りをささげていた。そのI君
(詩人・評論家石原吉郎)があるとき、私に
歎異抄講義をせよといふ。そういわれて
も、そのときは歎異抄の原本がなかったの
で、私の記憶をたどって、ウロ覚えの第一
条、第二条を秘蔵の紙に書き、それをテキ
ストにして、毎日曜の午後、ひそかにI君
ら二、三人の人々に歎異抄の講義をさせてい
ただいた。

それは、捕虜の境涯にあるだけに深く身
に沁みだ。なかでも第二条の最初の「おの
おの十余か国の境いを越えて、身命をかえ
りみずして、たずねきたらしめ給うおんこ
ころざし、ひとえに往生極楽の道を、問い
聞かんがためなり云々」の親鸞のお言葉
は、切々としてわが身にひびくものがあつ
た。』

I君、つまり石原吉郎氏は「仏典二冊(般
若心経と歎異抄)」というエッセイで、「歎異
抄と私との邂逅(めぐりあうこと)は、文字
をとおしてではなく、直接口移しで与えられ
たものである」と次のような文章で始めてい
ます。

『敗戦の翌年、ソ連領中央アジアの一収容

所での出来事である。敗戦につぐ抑留によ
って、かろうじて私の内部へささえて来た
価値観はことごとく崩壊していた。混乱と
無力観のなかで、「新しい」言葉を私は、
這いまわるようにして探し求めた。たまた
ま同じ収容所に、親鸞に傾倒している哲学
者(西元宗助)がいるのを知って、すがり
つくような気持ちで彼を訪ねてみた。

Nと呼ぶその哲学者は、一面識もない一
人の男の、「親鸞について、なんでもい
から教えてほしい」という性急な言葉をだ
まって聞いたあとで、「説明はどうでもい
いから、歎異抄をおぼえなさい」と答えた。
N氏はほとんどぜんぶ暗記していた。私は
祈るような思いで暗唱した。記憶力がすつ
かり弱っていた当時の私にとっては、精一
杯であったが、思考の大きな飛躍を強いら
れるはずの、独特な背理も追いつめられた
状況のなかでは、ほとんど抵抗なしに受け
入れられた。N氏は私にとつて、かけがえ
のない恩師となるはずであった。』と。

さて、シベリア抑留という苛烈な収容所の
体験談は、何を私たちに問うているのでし
ょうか？

今。私たちは自らの生死に堪え得る言葉と
出遇っているでしょうか。「無人島に一冊持
つていくとしたら、どの本にしますか」とい
う永遠のテーマは、「死を予期せざるを得な
い極限の状況にあつても迷うことのない本
物の言葉にあなたは出遇っていますか」とい
う問いでありましょう。

(今月号は、親鸞仏教センター発行の「現代
と親鸞」42号を参照しました。)

【寺灯雑記】

○秋の彼岸会法要が営まれる

9/22

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉どおりに夏の暑さもひと段落した、秋のお彼岸のお中日に彼岸会法要が勤められました。

定刻の午後一時に喚鐘によって法要の開始が告げられ、住職の調声によって『仏説阿彌陀經』が読経されました。

勤行の後には一昨年の文化講演会にご出講いただいた佐々木閑師に「ブツダに学ぶ新しい時代の生き方」と題し、お話ししていただきました。あてにならないものをあてにしている私たちの生き方を改め、「自分のためになにをどう手に入れるか」ではなく、「誰のために、なにをどう消費するか」を考えることの大切さをお話されました。また、葬儀は故人のためではなく、残された人々が大切な人の死を通して、仏縁に遇い、自らのいのちと向き合う場であることなど、ユーモアを交えてお説きくださいました。

○映画「明日へ」戦争は罪悪である」上映

コロナ禍のため開催が延期されていた映画「明日へ」の上映日が決まりました。

*観賞前売券 1,000円(当寺で販売)

*上映日時 10月18日(日)

14時・18時の2回

*会場 市川市八幡市民会館1階ホール
老いた落語家が語り継ぐ、第二次世界大戦中、叛骨の僧侶の反戦をもとにした映画です。是非皆さまにご鑑賞をお薦めします。

【仏教語講座「果報」(かほう)

「果報は寝て待て」という諺(ことわざ)があります。「幸運を求めるにはあせっては

いけませんよ。待ってれば自然とやってくるものです」という意味なのでしょう。また、運が強く、しあわせな人のことを、

「よく「果報者(もの)」といったりします。仏教では「因果の道理」を説いています。

「因果応報」といわれるのがそれです。因果とは、原因の「因」と結果の「果」

のことです。ですから、人の行いや考え方の善悪に対して、必ずそれに応じた結果があることをいっているのです。「善因善果、

悪因悪果」(善因楽果、悪因悪果)がそれです。ですから、果報とは、自分自身が「報

いとして受ける結果」のことをいいます。浄土真宗では、みなさんもご存じの通り、

祈禱(きとう)やまじない、占(うらな)いなどを行いませんが、これらは因果の道理に合わない事柄であり、仏教徒として、

ふさわしくないことだと考えられるからです。ところで、一般に使われている果報は、

しあわせな善(よ)い結果の場合だけのようですが、本来の果報には、善果も悪果もあります。

しかも、それは自分自身の行動や考え方によると説かれているのですから、寝て待つ

ているだけではどうもいけないようです。(大乘9月号より転載)

【仏教語講座「兎角」(とかく)

「智(ち)に働けば角(かど)が立つ。情に掉(さお)させば流される。意地を通せば

窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」夏目漱石の『草枕』の冒頭の名文です。

「とかく浮世はままならぬ」「とかく人間というものは身勝手だ」「彼には、とかくの

噂がある」などといっています。「とかく」はいずれにしても・ややもすると・あれこれ等を意味し、とにかく・ともかく・とやかく等に転化された副詞です。

この「とかく」は、夏目漱石が多用したことで広く用いられるようになったと考えられているようですが、「とかく」を「兎角」と書くのは、当て字だそうです。

仏教には「兎角亀毛(とかくきもう)」という言葉があります。「うさぎの角」や「亀の毛」は、本来実在しないものですから、現

実には無いのに、有ると錯覚したり、実体が無いのに、有ると幻想したりするとき、比的に用いられる語です。

仏教の中心思想である「縁起」や「空(くう)」を説くときに使われ、迷いの世界の現象を表す言葉となっています。

それが何故「とかく」の当て字になったのかはわかりませんが、兎に角、錯覚や幻想ばかりしていると、この世は、よけいに住みにくくなります。お気を付けください。(大乘10月号より転載)

【法座・行事の案内】

○婦人会法座(正信偈を学ぶ)

*十月三日(土) 午後一時

○常例法座

*十月十七日(土) 午後一時

法話・西原大地師(柏市 西方寺)

この日に予定されていた第三十二回文化講演会(会場 山崎製パン企業年金基金館)は新型コロナウイルスの感染収束が見えずやむなく中止致します。

尚、ご講師の中島岳志先生には明年令和三年十月十六日(土)に開催予定の文化講演会にご出講いただきます。

○いのちの居場所を考える会

*十月二十二日(木) 午前十時

○教行信証を学ぶ(行文類―正信念偈)

*十月二十四日(土) 午後二時

講師：前住職

*各法座・行事にご参加の際はマスクの着用をお願いいたします。

*十月三日(土)三時半からの定例門信徒会役員会は中止します。

【十月の掲示板のことば】

弥陀の本願信ずれば 死ぬるこの身が生まれるこの身と 知らされる

※「YouTube 中原寺」で検索

前住職が10分程の法話を配信中です。